

小論文

<総括>

試験時間	120分	総解答字数	1800字
------	------	-------	-------

近年続いた、課題文らしきものがない形式から一転して、今年は6つの文献を課題文とする問題が出題された。また設問は、それぞれの課題文を複数組み合わせ、それによって共通した観点を抽出することが5つの設問で要求されるという、課題文読解を主眼においたものとなっている。さらに設問が6つ、すべて論述問題として出題され、総解答字数は1800字という、きわめてヘビーな出題となっている。受験生にとってこの6つの設問に、ワードプロセッサではなくて紙に鉛筆で解答を書いていくというやり方で、すべてに解答しきるとするのは無理難題というものである。

また設問構造について、複数のまったく成り立ちの異なる問題文を組み合わせ、自分なりの解釈でそれらを整理統合することを5つの設問で要求しており、それによって6つある課題文のすべてに関して丁寧に深く理解することを要求している。従来環境情報学部では、課題文ないし資料が多く出題されたとしても、そのうちいくつかを自分で選び、その課題文や資料だけから自身の議論を立ち上げていくかたちが多かったが、今年の入試は違っており、その分課題文の読解にかける時間を多く取られる内容であった。

しかし、出題のテーマに関しては、環境情報学部らしいものといえる。美や倫理という価値的なものは、人間というこの特異な存在者だけがこれを目指して生きるものであろう。それは人間のみがもつ、単なる「生存」(Leben) ではない、「生活」(Existenz) の存在論的構造に根ざすものである。これを主題化し、それらに通ずるための生活と知のあり方を考察するさまざまな課題文が提示されており、その上で具体的なライフスタイルや状況が提示されて、それを科学的に分析する方法を提案することが求められている。

なお、変化があったといっても、それはあくまで近年の傾向との対比であって、過去はこのような問題を環境情報学部が出題することも多かったことを言い添えておく。ただし文章の量と論述させる文字数は最大級であり、受験生にとってハードルの高い問題であることは確かだ。

<課題文の分析>

大問番号	
内容 (主題)	人間の生活に根ざす美的なものを「科学」する
出典 (作者)	土井善晴・中島岳志 著、『料理と利他』ミシマ社、2020年 鷺田清一 著、『生きながらえる術』講談社、2019年 穂村弘 著、『はじめての短歌』河出書房新社、2016年 中谷宇吉郎 著、『科学の方法』岩波書店、2019年 内田義彦 著、『生きることと学ぶこと』藤原書店、2013年 三宅陽一郎 著、『人工知能が「生命」になるとき』株式会社 PLANETS / 第二次惑星開発委員会、2020年
長短・難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・変化なし・やや長い・ 長い) 難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・ 難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
設問	課題文	学部系統的	設問1	説明	150字	文献1と文献2に通底することを論じる。
			設問2	説明	200字	文献1と文献3に通底することを論じる。

小論文

			設問3	論述	250字	文献4のいう定性的研究の重要性を、文献3の著者の主張と関係づけて論じる。
			設問4	説明	150字	文献2と文献5に通底することを論じる。
			設問5	論述	250字	文献5が論じる「生きることに向きあうための学問的態度」は、文献4の主張する定性的研究のやりかたにも相通じるものがある。それについて論じる。
			設問6 (a)	論述	300字	Aは建築を専門とする大学院生、B(50代前半)はAの知り合いで小説家、Bの妻は彫刻家である。B夫妻は文献1~3を読んで感銘を受け、都心のマンションを引き払い、東京近郊ののどかな丘陵地帯の住宅地で、農家も点在する地域に一軒家を建て、移住することになった。そこでBは小説を書き、またBの妻は近所の農家の小屋をアトリエとして借りて制作を行うことになったという。Aはこれを聞き、また文献1~3のみならず文献4~6も読んで、従来の建築学の研究とは異なる対象として、異なる手法で研究してみたいと思い立った。その際、B夫妻の住まいかた、暮らしかたはどのようなものになりつつある、あるいはこれからなっていくと考えるか、具体的に記述する。
			設問6 (b)	論述	500字	AはB夫妻の住まいかた、暮らしかたがどう変化していくのかに興味を抱き、その詳細を調査させてもらうことのできる承をB夫妻から得た。しかしこの調査研究は難しいものとなる。この調査研究のために、Aはどのような工夫を盛り込んだ研究方法を考案するだろうか、できるだけ具体的に記述する。

※出題形式は「テーマ・課題文(英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

＜答案作成上のポイント＞

今年の問題は、解答字数が多くて大変である。また従来はメインの設問が最後にくるので、最初の方の設問はなるべく時間をかけずに処理して、最後のメインの設問に時間をかけて論述できたが、今年の問題は設問1～5だけですでにいろいろなことを1000字書かされる。そして最後の設問で800字書かされるわけだから、こうした処理は効かない。まずざっと答案を書く所要時間を設問ごとに計算し、時計とにらめっこしながら、その所要時間の枠内で可能な限りの確かな解答を書くということになるだろう。1800字を120分ということ、30字を2分で書かなければならないということだから、単純計算で設問1は150字=10分、設問2は200字=13分、設問3は250字=17分、設問4は150字=10分、設問5は250字=17分、設問6(a)は300字=20分、設問6(b)は500字=33分といった計算になる。

そうすると、各設問に対して精確な解答を書くのは無理である。設問1～5は、緻密な読みというよりは、直観的に自分で課題文を重ね合わせて、共通することとして何かを取り出すという雑駁な読みが求められているので、精確さを気にせず、自分の言葉で自分の読みを提起すればよい。そもそも設問は、まったく異なった場面で異なったことを論じている課題文を暴力的に処理することを求めているので、かなり恣意的な説明であって構わない。

一応メインは300字+500字=800字の字数での見解論述が求められている設問6ということになる。注意すべきは文献1・2・3に対する距離感である。各文献は熟練した者のみが生活世界の中で出会う美的なもの・詩的なもの・面白いものを明らかにしているが、こうしたものと、つい最近まで都内のマンションで都市的な生活をし、そして農家も散在する都市近郊の丘陵地帯で、その地域とは差し当たり関係のない創造的活動(小説執筆と彫刻作成)に従事し、したがってその地域の生活に根ざして何かを作る仕事に携わっているわけではない人間の生活という現実との間には大きなギャップが存在する。このことは設問6(b)の設問文の中に、「Bさん夫妻が触発された文献にAさんも触発されたということもあって、Bさん夫妻がどのような住まいかた・暮らしかたをつくりあげていくのかについて、Aさんは共感的に想像することはできません。しかし、Bさん夫妻の住まいかた・暮らしかたが実際にその通りになると仮定して研究方法を計画するわけにはいきません」と指摘されている。

以上から、まず設問6(a)については、Bさん夫妻が移住した住居の立地条件と、Bさん夫妻の職業生活とから、移動手段、食料品や電気・ガス・水といった生活必需品の調達、ゴミや排泄物の処理、近隣住民との関係といったポイントに関して予測できることを、客観性高く記述した方がよい。「できるだけ具体的に記述してください」という要求に対して解答するなら、文献1・2・3で語られている美的なもの・詩的なもの・面白いものについて、主観的な思い入れから恣意的な予測を立てるのは宜しくない。

設問6(b)について、文献1・2・3ではいずれも、社会的評価を追求定型的なものではない、日常生活の中で働く身体性・感性について論じられている。そのようなものが立ち現れてくるのは、一つには食の場面であり、また一つには身体運動の場面である。そのような場面について、その生活における変化を追跡し、できればある手法を用いて定量的に分析したい。文献4・5で人間の生活のような複雑なものの定量的分析には限界があり、つねに定性的な記述が意味をもちうるということが示されていたとしても、やはり科学的な研究のためには、複雑な状況を分解して、各因子について定量的に計測し、その変化を記述するということが重要なことである。これと、変化をもたらすある生活上の感性の発動とを結びつけることで、住まいかた・暮らしかたのありさまの変化に対する科学的な研究が可能となるだろう。

＜学習対策＞

今年の問題は難問であり、いわゆる演習問題としては難しい。だが、課題文は興味深く、設問に従ってその意味を深く理解し、また自分のものとしていくことは、環境情報学部の小論文試験に対する対策としては効果的である。IoT、AI、メタバースといった言葉がマジック・ワードとして流通し、そこでヴァーチャル(疑似的)でアーティフィシアル(人工的)なリアリティが社会的な価値をもつものとして喧伝されているが、それらはリアルな自然の中で身体をもって生きる人間存在に特有な美や倫理というものへの洞察の上に、その代替物として構築されるべきものであって、その洞察なくしては空虚なものである。文献6はAIに関してそれを述べている。さらにこの問題の設問文は、多彩な視点から語られる美や倫理といったものが、ある重なりをもっており、その点で何か共通して深層に存在するものについての多様な語りであることを学習させるものとなっている。設問1～5に答えていく作業によって、この学習ができる。

小論文

環境情報学部はがらりと出題形式・出題のテーマを変えてくることがあって、そのため小手先の対策では対応できない。ただし環境情報学部の小論文入試が一貫しているのは、日常の生活世界の中で私たちが出会う違和感や感動、あるいは問題状況を明晰に捉え返し、それを自分の大学における研究テーマとし、そこから新たなライフスタイルやコミュニケーションのあり方を創造していくというものである。この一連の作業は手間がかかるが、環境情報学部の小論文入試の対策にとって必須である。